

「Gastrointestinal Endoscopy—Technique and Interpretation」

Angelo E. Dagradi, M. D. 著

愛知県がんセンター副院長

春日井達造

昨年暮医学書院国際編集部から電話があり、医学書院ニューヨークから UCLA の Prof. Dagradi の消化器内視鏡の本を出版したからと書評を依頼された。丁度 Mrs. & Dr. Dagradi のメッセージ入りの美しいクリスマスカードを受け取った直後で、シルバーブロンドの童顔に眼鏡をかけ陽気で気さくな、小柄な彼の姿が目蓋に浮かんだ。間もなくブルーの表紙に白字で「Gastrointestinal Endoscopy—Technique and Interpretation」と書かれた B 5 判 262 ページのずっしりと手応えのある本が送られてきた。

この消化器内視鏡、手技と読影と題する著書は Dr. Dagradi が 35 年間にわたる内視鏡トレーニングの経験に基づき、内視鏡教育のアシスタントとして研修生に基礎的情報を供給する意図で書かれたものである。内容は内視鏡の歴史に続き総論として硬性鏡、ファイバースコープ、補助器具、電気手術器具、光源、内視鏡運搬車およびティーチングアタッチメントなど器械の解説、消化器助手、報告書およびその保管、写真撮影、殺菌消毒および器械の取り扱いと保守についても簡潔ではあるが要領よく説明している。更に消化器内視鏡の一般的適応と禁忌のほか内視鏡検査の合併症については、患者と

エンドスコピストおよび助手の合併症に分け、患者のインタビューと指導、前処置、全身麻酔と術中内視鏡検査などと共に実地に則して懇切に述べていることが注目される。内視鏡手技編では上部消化管パンエンドスコープ、直腸・シグモイドスコープ、コロノスコープ および ERCP につき手技、適応と禁忌、患者の準備、挿入手技、エマージェンシーエンドスコープおよび合併症について詳述している。読影編においては、上部消化管は総論、食道、胃、十二指腸および出血病変に分けて述べているが、各々の臓器について内視鏡解剖学を X 線写真や図を用い詳細に解説し、初心者の理解に役立てていることは、著者の内視鏡トレーニングに基づく発想で、本書の特色と言える。また、彼の得意な食道内視鏡に関する記述は一段と光っている。各種胃疾患についても述べられているが、わが国内視鏡医にとって最も重要な胃癌に関しては Borrmann 分類のほか日本の早期胃癌分類を紹介しているが、そのほか見るべき記述の見当たらないのは淋しい。胃癌が少なく依然として早期胃癌診断についての関心が低く、その努力のみられない米国臨床医学の実情を示しているものかもしれない。一方、出血病変に関しては別項

を設け詳述されている。

直腸および結腸など下部消化管内視鏡検査の記述は要領を得ており十分であろう。治療内視鏡編では生検、異物摘出から食道静脈瘤の硬化療法、内視鏡的プロステージスやドレナージ、出血巣の電気凝固、ポリペクトミー、内視鏡的乳頭括約筋切開術、更にレーザーに至るまで最新の内視鏡手術を漏れなく詳述している。しかしレーザーに関しては消化管出血のコントロールにとどまり、消化管腫瘍の治療にアプローチしているわが国の臨床家にとっては物足りないであろう。

最後に小児内視鏡検査についても言及していることは、本書を消化器内視鏡の手引書として完璧を期そうとした著者の心意気を感じられる。最後に敢えて一、二、気になる点を挙げれば内視鏡写真が一般に暗く、その質がわが国内視鏡医からみると食い足りない感があること、内視鏡像読影解説に当たり X 線写真、標本の肉眼像や組織像などが同時に呈示されれば症例の把握と疾病の理解に一層役立ったのではないかと思った。また引用文献にわが国の優れた論文がほとんど見当たらないのも気になった。日本から出る英文論文が情報の洪水にのまれてしまっているの目にとまらないのかもしれない。

いずれにしても英文の消化器内視鏡の手技と読影に関する手引書として内視鏡器械、手技および読影の全般にわたりよく書かれており、価格も手頃で初学者はもちろん習熟者にとっても座右に1冊をお薦めしたい。特に英文で内視鏡の論文を書くときの参考書としても重宝であろう。

B 5 変型, 262 頁, 図 40, 写真 111,
原色図 77, 1983 年, ¥ 12,000, 千 350

医学書院 刊